

御幸町だより

№ 138 2018年11月25日

〒604-0933

京都市中京区御幸町通二条下る山本町434

京都御幸町教会

TEL・FAX (075) 231-3441

<http://k-gokomachi.ciao.jp>

与えること、受けること

牧師 村島 義也

「受けるよりは与える方が幸いである」。主イエスの御教えである。

これについて、幾つか信仰の冊子を拾い読みする内、二つのお話(証)が目にとまった。主の御教えを生きるためのヒントを得た思いである。「与えること」「受けること」について、改めて考えさせられた次第である。お分かちしよう。

一つ目は「与えること」について。米国のある方が「祖母の思い出」として語られたお話。〈お祖母ちゃんは、編物(レース編みやキルト作り)の名人で、数々賞を取る腕前。作品は教会や地域のバザーでいつも人気を集めたものであった。ただし彼女は得意顔をするタイプの人ではなく、そもそも気前のいい人で、むしろプレゼントすることを何より楽しみとされる人であった。さて、しかし災難は人を選ばない。ある日、お祖母ちゃんの家は火事で全焼…。隣人たちは同情し、また心配し、言ったそうだ、「あなたのあの素晴らしい作品、どれか一つでも持ち出せましたか?」。お祖母ちゃん答えて曰く、「ええ、人様に差し上げたものだけはね」。そして後にはこう振り返っておられたという。「私は火事によって失った物よりはるかに良い物を神様から頂いておりました。火事も奪うことの出来ないものをです」。常日頃、実は最もよい物から順に持ち出しておられたわけである。そして神から頂いた良い物とは、生き甲斐と与える(プレゼントする)喜びであった。それにしても差し上げたもの(与えたもの)だけは助かり、残った(しかも最良のものが)。ここにお祖母ちゃんが今までに為して来たこと、生きて来たことの証は豊かであった。生きていくことの意味の深い豊かさ、強さは、ほんとは何処にあるのだろう。自分のために集めたり貯めこんだりではなく、与えること。人と共に生きて、そこで自己を提供していく部分～本当の命の証というものは、そういう所でこそ培われ、強くされ、守られていくものであるのかもしれない。それは神の御国の顧みの下にあって。

さて、次のお話…今度は「受けること」について。これも米国、あるご老人(男性)の証。〈この方は若い頃から数年前までボランティアに熱心で、教会や地域の老人・不自由な人々のお世話をすることを喜びとして来られた。またそれは「受けるより与える方が幸いである」という主の御教えを生きる信仰の実感の場でもあった。ところがこの頃は年老いて自分が不自由な身の上となり、もう以前のように働けない。すっかり意気消沈、喜びが消えたようで…。教会の人や隣人たちが、今度は自分のために手伝いや世話を申し出てくれることもあるのだが、(ちょっと僻みも入って)そういったことにもなかなか素直に感じられず、自分の中から孤独になってしまっていた。ある時、牧師さんが訪ねてみえたが、帰り際にこんな言葉を残していかれた、「他の人の善行や愛の機会を奪ってはいけませんよ」。これにハッとしました!自分が他の人の好意を拒むことで、もし彼らにおける神への奉仕の機会、愛の機会を奪っているのだとしたら…。そして気づいたのだそうだ。自分は受けることをもって与えるべき者であることに。神のチャンスと世話を受ける側からの交わりの感化、愛を。積極的な思いがこの人に蘇った。受けることにおいてもまた与え得る者だということ～これは人の真実を物語る処であるかも。与えること・受けること、その役割・立場は時と場合によって変化しようが、与える立場は受ける器あつてのこと。「受けるよりは与える方が幸いである」という御教えは、ただ一方通行のものではなく、神の御目の下に実に美しくつり合いを見せる事柄であるのだ。与えることの内に「受け」(報い)を期待する欲が大きければ善はみすばらしい。受けることがただ我儘になっては、愛は空しい。与えることにおいても、受けることにおいても、真心と人を思いやる愛、与える愛を、いつも主イエスから学ぼう。つまり、与えるにせよ、受けるにせよ、愛を持つことだ。そして愛は、結局「与えること」というわけなのであろうか。